

郵便

明治壬申七月

驛遞察檢



新聞

第十號

新貨三錢

東京横山町三丁目

太田金石衛門

門 48
號 407
卷 1

凡例

遠近の人民多し性情よく相通し事任しくお達する新聞紙の如きは
 亦一故に西洋諸國苟も文明の名ある地は必ず新聞紙の如きは
 ありて國內國外と論ずれば九百の事務を網羅し併せて奇事異聞瑣
 語常談と米困もて日小刊し月小刊し傳布する所幾んど家
 喻戸曉く小説の概あれハ國人甚くあれと便しそ今爰小郵便
 此新聞と刊行するも廣く遠近の子成我と大いに内おれ情を通し善
 古今の變を知りあつて世に利益あふんし成欲とあり蓋し龍水の
 氷成見し天下の寒を知るべしればは小冊子と思ふ所の亦當今子情の
 班と類ふべし

郵便報知新聞第十號

明治五年申七月

○埼玉縣より報知

埼玉縣廳より於て文教を昌んよ一緩内の民として知識
 と擴りしめんこの趣意を以て各區に郷學校を興さん
 との舉あり先頃岩槻一嚮舎と設けし同爰に埼玉郡岩
 槻町農育藤某百圓の金とぞ知し校費の内一相備ある
 願出たりしうて終く文運盛んふして昇化の日は新
 るの徒と辨知し衆人より先達ち家産を同はぎ幾多の金を
 一時よぞ出たりたるは稀ある考時のりれり付縣廳より

及口竹間 第十號

其真意を褒賞し若干のふと賜りたり

同縣及下中山道、藤浦和、大宮、上尾、桶川、鴻巣、陸羽街道、草加、越ヶ谷、粕壁、杉戸、幸手、栗橋、右十二ヶ宿、兼テ伺清の通七月十日より傳馬所相廢止陸運會社開業致し會社規則は東海道の振又照準致す云々

○鳥取縣より報知管内エ布告

太政維レ明ニ萬機維レ新ナル今日御布告ノ御趣意小民婦女子ニ至ル迄奉載致スヘキハ勿論ノ事ニ候処往々其文ヲ讀得ザルヨリ其意味モ解シ無終ニハ讀得サルヲ以テ常ト為シ御布令ヲ等閑ニ心得候哉ニ相聞

以ノ外ノ事ニ候右俗習ニテハ折格新政ノ御旨意モ徹致サス難有御教諭等モ徒然ニ看倣シ或ハ御制法ヲモ不相辨ヨリ不圖違戾ノ罪ヲ招キ誥旨無罪ノ良民譴罰ヲ蒙リ候様ニ立至リ實ニ不便ノ有様ナラズヤ依之今般文部省ノ官許ヲ得テ官省ノ御布告及ヒ當縣ノ布令トモ一切活板ニ仕出シ右傍ニ平假名ヲ付ケ讀ニ勞ナク左側ニ片假名ヲ付ケ粗々文字ノ意味ヲ示シ小前女児ニ至ル迄文面ノ大概ヲ解シ得候様相綴リ令頒布候向後下民小前ニ至ル迄能々熟讀シ御旨意奉載イタシ候様急度心得ベキモノ也云々

○小倉縣々々旱魃模様御届

當管内豊前國村々の幾四方植付前々々降雨更々々々
溜池の水引落し植付中樹雨も有々々々又十分の
潤あり魚淵く植付と相滴り共土用十日程前々々
照込雨気少く追々溜池引落し乾中上毛下毛仲深企救
郡中々別して旱魃甚々坊所有く田面干上り比別亦々
お奉殿追々届出此上稼も潤雨多々々々々々々々
可及於も難斗ふ容易形勢ニ付此後の摘稼追々可上
以得於ふぬ故は殿上々々云々

○東京鎮臺水戸分営被置候旨陸軍省工御達之有々々

○六月中旬以赤戸海岸に於てお玉廻りの米多分着
てありうれば大坂より人足多人数来りたり時々その
内裸体にて徘徊せりけあると云邏率より咎めりり
やう殿しき西布告もあうりるよ海へ何ゆへ移く見苦
しき体とありやと叱りうれば人足蒼々々々やう作の
趣ふ所なより一とも窮して衣を買ふ能まばゆりる忍
んで此浅業とあるのみうてい若し衣食号るごうは交
して移る業と為しあり私うても人々々々々々ばりる新衣
と若し帽を載き車に乗して意氣揚々たるの美と
存ト申せららんや只その時を得ざるのみと語りけれ

バ邏卒答る終るごとく、嗚呼は人足何りのある
 乎、これ榮枯窮達は、當るは身の賢不肖によるのみ、あふ
 亦必を時運よするべければ、馬を跨り車を駕するの業
 は人皆之を得ざるべし、然れども、何れに窮困した
 りして一袍衣を得る終るごとく、や抑裸体の禁令ある
 は凶惡の風俗を善美せんが、設けられざる法あれば、
 その令を守りて人民の本分あるべきに好てその身の
 窮苦を鳴らし、疎放の言を發し、自ら脩め、他の妨とあり
 國の禁令を犯し、世の風俗を敗るの徒少あり、右人
 足も書生者流のり、あらん、殆ど慨然と堪ふらん、

○新治縣ヨリ報知博覽會取設ノ義ニ付伺書大意
 當縣ノ羨ハ都下ヲ距ル一總ニ二十里ニ不且衆庶各々
 開化ノ域ニ可致進歩等ノ処無其儀固陋頑愚動モスレ
 ば今日ノ御趣意ニ相戾リ候風俗右者全多年積弊ノ令
 然處ニテ開縣以來精々説諭ヲ加へ方令ノ目途ヲ相示
 候得共其習弊容易難相變依而七月廿日ヨリ九月十日
 迄五十日ノ間土浦等覺寺ニ於テ展覽會ヲ相設ケ海外
 ノ品物及ヒ國內ノ古器珍品ヲ雜聚シ悉ク之ヲ陳列シ
 衆庶ヲシテ令臨之候ハ、各々工藝技術ノ精妙ヲ知り
 時運ノ變換ヲ推知シ開化ノ域ニ令進歩ノ一助ニモ相

成へくと存候条即別帝票告稿相添此段相伺候十リ云
ヤ

○郵便休暇ノ儀ニ付大藏省ヨリ御達

正月三ケ日同七日十五日十六日三月三日五月五日七
月七日同十五日十六日九月九日及天朝節ハ郵便休暇
ノ規則ニ候処以來毎歳元旦一日ヲ休暇ト被定候事

○品川驛港屋某あるもの今般北海道サツホ口へ妓楼
取役儀冨拓使へ願濟して遊女となり松緑外二十人
藝者小勝か二人とも七月十日横濱表を出帆せり程ふ
日遊民ともはるまじの宜彼の地の整潔推て知るべし

○酒田新報知

元大泉藩酒田縣士族和藤宅馬中村文次郎今泉鐘一郎
志賀金三郎野久良鹿兒島縣村田某英人六名と横濱本
牧にて炮術の試合をふせし英人点数総計二百二十
八我國縣士点数二百四十二即ち我方より二十二差勝
と得たり其術の丹練よく羨すべし

○岡山縣米利堅人の像ニ付申届

米人マステク當縣下備中國下道郡矢田村より來り且
痛あきし艱苦の抄括ハ雇英人モリス電信機ハ用して
連行の砌右土民共右モリス隨行のものとも心は宿所

報知ありびり早速モリス其越連路のいは言語
 篤と相通トふり越右モリス同行の電信機掛り安真
 りも尚縣に通達されあり且廣島縣へも立の上去月
 十三日同縣より送リナリ付尚縣學校教師の通毎
 といて篤と取個ウ支取去月中井戸へ碇泊の米國軍
 艦アーシフ口の要組の歩兵よられありウ支取中不
 適意の事情ありあり付同所お脱陸路獨行して長
 崎湊迄越路必可致心組より越お支ナリ依之翌十
 四日井戸本艦へ引渡さるるた色尚縣よあめて別私仕
 立護送人々添兵庫縣迄送リナリ云々

○佐賀あり報知

當爰内より民漸く開化に向ひ社を結んで學校を興す
 所三四ヶ所あり又佐賀より伊万里迄十二里あり傳信
 線を引くの形を出し既又許可を得たり
 同縣士漢香月作一郎ある者同族姉川兵衛親隠居平
 治を双殺せる始末を尋ね用事ありて良七といつる
 もの家を訪ひしは折前死ひありして近隣の人四
 五輩を搦き度々延を設け酒宴を催せしが平治は裸体
 きてそのまゝ何れも雜言をありしれども醉狂の体
 けりあり合すしつゝ平治尚教を傾け禪を脱し

高声^{たうごう}又^{また}被^かひ^ひあ^あの^の凄^{せい}め^めあ^あの^の操^{そう}返^{かへ}一^{いつ}呼^より^り唐^{たう}中^{ちゆう}を^を振^{ふる}返^{かへ}す
 一^{いつ}言^{ごん}語^ご同^{どう}の^の振^{ふる}舞^ぶあ^あれ^れを^を見^みる^るに^に忍^{しの}び^びず^ず是^{こゝ}を^を咎^{とが}め^めし^しれ
 ば^ば平^{へい}治^ち怒^どり^りて^て我^{われ}言^いふ^ふ所^{ところ}善^{ぜん}あ^あら^らず^ずの^の惡^{あく}あ^あら^らず^ずの^の所^{ところ}謂^いを
 聞^きく^く一^{いつ}と^と善^{ぜん}体^{たい}又^{また}摑^{つか}み^みつ^つと^と押^お倒^{たお}し^し傍^{かたわら}若^{わか}き^き人^{ひと}あ^あれ^れを^を止^とむ
 と^とは^は本^{ほん}短^{たん}力^{りき}を^を以^もて^て平^{へい}治^ちの^の脇^{わき}を^を突^つき^き面^{めん}部^ぶ敷^しを^を所^{ところ}切^き付^け
 一^{いつ}つ^つた^た平^{へい}治^ち苦^く痛^う又^{また}堪^たく^くべ^べ途^{みち}出^いて^て良^よ七^{しち}が^が烟^{えん}に^に倒^{たお}れ^れ死^し
 一^{いつ}つ^つと^と也^や
 酒^{しゆ}を^を以^もて^て産^うを^を破^{やぶ}り^り身^みを^を害^{がい}す^する^るの^の古^こ今^{こん}扱^{たく}奉^{ほう}又^{また}違^{ちが}へ
 ば^ば醉^{すい}狂^{きやう}此^{こゝ}の^のみ^みま^まを^をあ^あら^らず^ずも^も本^{ほん}邦^{ぱう}の^の酒^{しゆ}は^はア^アル^ルコ
 ル^ルの^の質^{しつ}を^を多^たく^く含^くめ^めば^ば人^{ひと}身^みの^の健^{けん}令^{れい}を^を換^かへ^へ命^{めい}を^を縮^{ちぢ}む^む

あ^あら^らび^び殆^{たいてい}ど^ど阿^あ片^{ぺん}烟^{えん}と^と一^{いつ}間^{かん}の^のみ^み近^{ちか}東^{とう}西^{せい}洋^{やう}制^{せい}の^のビ^ビール^{ール}を
 良^よ飲^んと^と稱^{しょう}し^しあ^あれ^れを^を喫^くす^する^る人^{ひと}多^たけ^けれ^れど^ど過^か飲^んぬ^ぬり^りし^し
 其^{その}害^{がい}酒^{しゆ}と^と同^{どう}一^{いつ}豈^あ慎^{しん}ま^ます^すん^んや^や酒^{しゆ}を^を忘^わ憂^う艸^{そう}と^と滑^{くわ}ひ^ひ
 と^と則^{すなは}古^こ人^{にん}の^の謾^{まん}言^{ごん}一^{いつ}つ^つと^と惶^{おそ}る^るべ^べく^く嗜^たむ^むつ^つと^と引^ひ憂^う系^{けい}と
 も^も云^いふ^ふ所^{ところ}也^やの^のあり^り
 ○福^ふ岡^{おか}の^の貫^{くわん}属^{じゆく}士^し族^{しやく}上^{じやう}野^の何^{なに}甚^{じん}あ^ある^る人^{ひと}飼^{かう}蓄^{じやく}の^の鶏^{けい}は^は何^{なに}と^と四
 足^{しよく}を^を備^びへ^へる^る雛^{ひな}を^を生^なみ^みし^して^て追^お々^{じやく}生^な長^{ちやう}よ^よい^いし^しる^るの^のよ^よ
 情^{じやう}勢^{せい}を^を供^{くわ}し^し看^{かん}觀^{くわん}多^たく^く接^{せつ}ふ^ふめ^めん^んと^と我^{われ}
 ○本^{ほん}月^{げつ}廿^に六^{じやく}日^{にち}夜^や十^{じゆ}二^に字^じ以^もて^て常^{じやう}州^{しゆう}水^{すい}戸^こ旧^{きう}城^{じやう}中^{ちゆう}東^{とう}の^の方^{かた}より
 出^い火^{くわ}北^{きた}風^{ふう}強^{かう}く^く空^{くう}中^{ちゆう}燃^も火^{くわ}廣^{かう}く^く城^{じやう}中^{ちゆう}一^{いつ}圓^{えん}燒^{しやう}失^{しつ}一^{いつ}三^{さん}階^{かい}櫓^ろ五

十間櫓のこ焼残り夫より柵町元朝比奈邸新造殿續々
 一飛火は邊延焼及ぶ同曉七字を消滅消しつり
 ○元暦津世子は戊辰己未其存在定のあふざり一がは
 節顯然たるの悦あり多分欧羅巴行うても致されたる
 りはあふんの寛典の心所置りもお成りたれば一挙有
 益の賢子あふんと或る人語りき

報知新聞第十号終

今般郵便報知新聞刊行の旨趣は遠く隔る國々其物産を互にお海せしめ且府下
 小せす細太る實各地相知りしめんと依るを修め其後不存申善の賞譽
 暴徒に捕縛機械産物の新著の益緑織物漆器陶器米穀茶葉其他の物品製造
 耕作の多寡並に風雷雨水火の災難を暖氣候は是よりく更りたるを
 皆夫々に筆記して聊支體虚飾を加へて時々掲載して是を讀み後免人及び賣
 弘所小送り越へ給はん事代希也

郵便報知新聞一冊價利貨三錢毎月五号宛出紙

當時發兌号ヨリ先廿冊分引受候向き一割引

同四十冊分ハ一割半引

一ヶ年分引請の向ハ二割引

右之通割分受候金郵便賃引候共毎号發兌候方は是の郵便賃は在り申候

東京橋山町三丁目

發兌人

大田八由右衛門

